

# 高垣眸『宝島』再話の挑戦

——プロット再生の可能性——

The Problem of Creative Rewriter:

Takagaki Hitomi's *Takara-jima* (Treasure Island)

佐藤 宗子

Motoko SATO

文学作品の再話のされ方は、実にさまざまである。ストーリー展開の省略や  
改変、語りの枠組の簡素化、舞台設定の変更のみならず、こまかな描写やエビ  
ソードなどの差違も、ときとして重要な変化たり得よう。では、どのような変  
更が加えられてなお、「原作の再話」として認められるのか。また、それが、  
一つの文学作品としての評価を受けうるのか。

原作絶対視の立場からすれば、すべては単語の選択やせいぜい語注の付加で  
解決して「完訳」すべき、ということになるだろう。だが、特に言語圏をこえ  
て年少の享受者に物語を手渡そうとする場合を念頭におくとき、私としてはも  
う少し積極的に再話者の役割を考えたい。即ち、再話者はどのように主体的に  
変更を加えて／加えずその再話を仕上げたのか、それを評価の対象とする。そ  
の上で、前掲の観点を提起するのは、これが、ある文学ジャンルの継承におけ  
る基本と変容といったより広い研究につなげていける一つの手がかりとなると  
思うためである<sup>1)</sup>。

今回とりあげるのは、ステイトンソン原作の『宝島』<sup>2)</sup>である。この作品が、  
日本の児童文学の世界でも、代表的、古典的名作として位置づけられているこ  
とについては、以前にも指摘したことがある<sup>3)</sup>。十九世紀後半のイギリス児童文

学において「冒険小説の完成」<sup>4)</sup>とみなされるこの作品は、後述するようにす  
でに十九世紀のうちに日本にも紹介され、以後何人かの翻訳者を得た。ここで  
それを経てのちの再話——高垣眸『宝島』に焦点をしぼる。

## 二

具体的な内容検討に入るまえに、高垣眸『宝島』の書誌的確認や、日本にお  
ける初期の『宝島』紹介、また同作品の一般的認識度について、簡単にふれて  
おく。

高垣眸については、少年向伝奇小説やSFの作家として著名であり、特に説  
明の必要はなからう。また、彼が少年期からの『宝島』愛読者であり、その影  
響のもとに処女作「龍神丸」(『少年倶楽部』連載は一九二五年四月十二月)  
が執筆されたこともよく知られている。その高垣が『宝島』の翻訳(再話)を  
刊行したのは一九三七年。講談社の「世界名作物語」の一冊としてである。そ  
して第二次世界大戦後も、版を変えて高垣『宝島』は生きる。私が確認できた  
のは次の三点である。

- ・『宝島』(少国民名作文庫) 一九四六・九・一五
- ・『たから島』(世界名作物語) 一九四八・五・二五
- ・『宝島』(「世界名作全集」第二巻) 一九五〇・六・三〇

戦前の版は未見だが、戦後の版は表記の差はあるものの（「名作物語」版はさらに小見出しも多少省略されている）、本文は基本的に踏襲されており、「名作文庫」版と「全集」版は挿絵ともに嶺田弘のものが使われている。ただし、「この物語について」（「名作文庫」版は「く就いて」と題された前書きでは、原作成立からの年数、高垣が初めて『宝島』に接してからの年数、そして今回訳出を依頼されたシリーズ名がそれぞれに記されており、各シリーズ収録作を単独で手にした読者は、このシリーズのためにその時点で訳出されたもの、と思いきまされたのではないか。ここでは手元にあるうち小見出し・挿絵が最も広く普及した「全集」版に近い、「少国民名作文庫」版にもとずいて引用等を行う。（ただし新漢字にあらためる。）

さて、右にもふれた前書きで、高垣は、『宝島』が中学生の頃からの愛読書であったことを告げ、だからこそ「世界的名作を選んで何かやれ」との依頼に、「言下に『宝島を。』と」答えたと述べる。その執筆に際しての姿勢・方針を、次のように語る。長くなるが、重要なことなので、要点をまとめつつ適宜引用しておく。

・原作は「かなり昔に書かれ」「文章もとてもむづかしく」、「そのまま訳し」ては、「日本の少年少女諸君には、どうしても、ハッキリと、その面白さが呑み込めない気が」する。

・「そこで、私は筆をとるにあたって、原作の頁を伏せてしまひ、長い間愛読して殆ど暗で覚えてゐる『宝島』の物語を、心に浮かぶまゝに、全く自分の作品として再現」した。

・原作の冒頭より前に起きた事件は、みなあとから会話の中に出てくるが、「それでは、興味も薄いし、わかりにくい」。よって、該当する事件を「全部抜き出して来て、新しく、私が綴り合はせ」た。<sup>(5)</sup>これで、「筋もハッキリわか」るはず。また、これは「原作の値うちを、すこしでも傷つけ」はしないし、「却つて、イギリスの海賊魂とでもいふやうなものが、日本の少年少女諸君に、ハッキリと浮かび上つて、わか」と信ずる。

長い読者歴を誇る作品であるがゆえに、尊重しつつも、再話にあたっては自分なりの工夫をこらし、それを高らかに読者に宣言してみせる。しかも、その

主たる方法と意図まであらかじめきちんと示しているわけで、ここまで手の内を読者にさらしてみせた再話は珍しいだろう。それだけ、高垣としては自負を持つ出来栄えの作品となった、わけである。

『宝島』は、すでに一九一五年に、宮井安吉により「新作たから島」として訳出が『文芸倶楽部』に連載されている。<sup>(6)</sup>そして、一九一四年には押川春浪——彼もまた強くステイブンスンの影響を受けた作家である——が『小説宝島』（新潮社）として訳出した。その後も多くの翻訳・再話が刊行されてきたわけだが、漢字・かな表記の差はあれ、訳題も『宝島』ではば一貫してきたと考えてよい。また宮井訳が、多少省略しながら大体は原作に沿って三〇回構成にしているように、早い時期から全体の構造及び作品への導入部も、安定したかたちで定着してきたといえよう。即ち、宝島への往還を骨格とすること、冒頭で登場するジムを中心に物語が進められていくこと、途中印象的な悪役（ジョン・シルバー）が登場すること、といったあたりが、題名に端的に象徴される共通理解事項として、文学関係者にも、さらには一般にも広く流布するに至ったのである。

しかし、その一方、ではどのような展開か、筋立ての説明を求められると、すぐに窮してしまう。よほどよく読みこんで記憶していない限り、出航の場面までもたどりつかないことになる。それは、単に登場人物の人数が多いためでなく、人物同士の人間関係と、出来事の推移を連関させたかたちでの記述が、特に前半でひかえられているためではないか。そこを、高垣は原作の難しさ、わかりにくさと捉えているようにみえる。

とすれば、高垣再話をとりあげる前に、まずは原作の構成や特徴を、さらっておくことにしよう。

### 三

原作『宝島』成立にいたる経緯は比較的よく知られている。邦訳でも訳者あとがきなどで簡単にふれられていることが多いし、一般向だが岩波文庫ではステイブンスンのエッセイ「私の第一作」を収録している。<sup>(7)</sup>各種解説はこれを主要な参考文献の一つとしているようだが、ここでは要点をおさえてまとめ

れている、『オックスフォード世界児童文学百科』<sup>(8)</sup>に依拠していくつかの点を確認したい。即ち、一八八一年、アメリカ人である妻ファニーの連れ子、ロイド・オズボーン(十二歳)と宝のありかを示す印つきの地図を作ったこと、父親が今度は登場する事物に関連した細部の創造に励み、そうした成果をステイブ・ソンソンはまた物語づくりに生かした。作品は同年秋から少年向雑誌『アワ・ヤング・フォークス』に「ヒスパニオラ号の反乱」の副題付き、作者名「ジョージ・ノース船長」で連載されたがあまり反響はなかった。ところが八三年、キャスル社から単行本が刊行されるや、批評家の絶賛をうけ、人気を博した——という。楽しみとして始められた創作である点、また連載では読者にうけず、単行本となって名声を得た点については後でまたふれることになる。

次に、『宝島』はどのような特徴をもった物語であるのだろうか。

地主のトリローニさんや、医者のリブジー先生をはじめ、そのほかのかたがたから、あの宝島についての話を、はじめからおわりまで一つ残らず書きとめておくように、(中略)といわれたので、わたしは、(中略)時間をさかのぼって、(中略)顔に刀傷のある、日焼けした老水夫が、はじめて宿をとった時のことから、話を始めることにする。

一部省略したが、これが冒頭の一文である。トリローニやリブジーら、年長者にすすめられて筆をとる「わたし」。そもそも、主人公自身の名前が「ジム」だとわかるのは次の章もなかなばになってからだし、「宝島についての話」＝事件から何年たった時点が現在であるのか、今の「わたし」は何歳なのか、といったことは最後まで不明である。(大団円の記述から、少なくとも年単位の時間が経過したことは推察できるが。)また、「地主」や「医者」の属性は当時から一貫してかわりがないが、それ以外の身辺の変化がこの二人に起こったのか、そして肝腎のジム自身は現在どのような社会的地位にあるのかも、一切言及されない。

こうした読者にとっての不親切は、逆に、本作品は(作品内部においては)

素人の筆によるきわめて個人的な手記という方法を貫き通している証ともいえる。想定される読者も、執筆要請をした地主や医者など事情をよく知る者であり、よって、主人公を含め三人の現況をいちいち告げしらせる必要はないし、ましてや主人公が冒頭で名のりをあげることなど不要である。その延長に事件の核をおいて考えるなら、宝島へと船出し、めでたく七〇万ポンドの宝を獲得して帰ったというのも、いかに劇的であれ、すぐれて個人的次元の出来事である。

一方、先に引用した冒頭からも明らかのように、これはそもそも回想された事件の記述である。主人公及びトリローニ、リブジーの三人は、当然のことながら現在存命であり、少なくとも彼らは安全に帰還することが保証されていると知りつつ、読者は過去の冒険の進行につきあう。その経過がたとえ「うまくいきすぎる」ように見えたとしても、体験者の回想記憶ゆえそれも当然、と大前提をもちだされれば、その不自然さをそれ以上追及することはできない。何といてもこれは、一回限りの僥倖にみちた冒険、の記録なのだから。

これらのことを総合すると、次のように言えはしまいか——「わたし」＝ジムは、体験したかたちでしか物語れぬ語り手だ、と。たまたま宝物争奪の一件にふれ、まきこまれ、積極的に関与し、幸いにも目的を達しえた過程を、記録せよといわれればともあれ忠実に思いおこし、推移の順を違えず書きすすめる、筆者＝語り手。今や彼にとっては解けている謎、結果のわかつている行為も、とりあえずその時点の心情や判断に即して記述される(多少の反省的言辞などはさみこまれるが)。

遭遇してしまった者、僥倖を得た者の特権を十分に生かした、一回性の冒険の私的記録——それが、原作『宝島』のもつ特徴といつてよい。

#### 四

(1)

西暦千七百××年のことだ。

此処は、海図チキトにさへ載つてゐない、大西洋の真只中にある、奇怪な無人島だった。

高垣眸『宝島』は、右のようにはじまる。「イギリス青衣海賊共が、秘密の根拠地の一つにしてゐた」この島の描写が多少なされたあとに、すぐに登場するのは一隻の船である。

あゝ海王号！<sup>シーキング</sup> これこそは、イギリス青衣海賊中でも、最も人から恐れられた大海賊フリント船長の乗込んでる船なのだ。

宝島に視点を据え、やってきたフリント船長の行動を追いながら、語り手は、フリントの宝物隠匿と手伝わせた新米船員達の殺害、後をつけてそれらを目撃したベン公の存在と彼の島への置き去り、出航後の船内におけるビル、シルバー、ピューラ主要人物の配置と話をすすめてゆく。さらにその後、フランス軍艦との海戦という全くあらたにつくられたヤマ場があり、負傷し死に至ったフリントから問題の海図等を盗み逃げたビルの後を追うように、舞台はやがて「第二篇」の二つめの小見出しで、「ベンボー提督亭」にうつる。この間、冒頭の宝島へのベン置き去りから十年の時が流れた、とされる。

関連する事からの、時間的に最もはやいものから順に記述する——「それからどうした、それからどうした」と単軌道をはしるように時系列に沿って物語る方法は、幼年文学の範とされるが、回想形式をはずし梓構造を単純化するなど再話化の際にもしばしばみられる。この場合も当然ながら「ジムの個人的回想」という枠は、はずされる。また、こうして語り出された以上、途中で急にジムが語り手となることはなく、彼は三人称的に記述されてゆくが、これも再話——特に簡略化される場合——にまま見られるやり方ではある。

だが、こうした「第一篇」の創作方法は、そうした一般化しうる「わかりやすさ」目的の再話技術とのみみなしてよいものか。結果的にそういう効果もあげていることは否定しないし、高垣自身もそれを含めて考えてはいただろうが、主眼となるのは別のことであったはずである。

本来的な、「第一篇」創作の意義——それは、作中における「宝」の意味づけの変更にある、と私は考える。

十七世紀後半から十九世紀初めまで、イギリスは「第二次百年戦争」とも呼ばれる植民地戦争をフランスとのあいだに展開し、北アメリカやインドでも戦っていたとは、史書を翻ればすぐにでてくることである。『宝島』のなかにも有名な海賊の名前に言及した会話がでてくるし、扉ページのあと、息子ロイド・オズボーンへの「献呈の辞」の次におかれた「買おうか買うまいかと迷っている人に」という詩でも、何人かの海洋冒険小説作家の名をあげながら、本作が「わたしの海賊たち」(傍点引用者)の物語であることを誇らしげに語り、作品への誘いこみとしている。前掲の『オックスフォード世界児童文学百科』にも、何と「海賊」という項がある<sup>(9)</sup>ことが、イギリスにおける歴史的な、また児童文学的な、「海賊」認知度の高さを示している格好の例である。

原作でも、第六章でトリローニに、名高い「黒ひげ」以上の脅威であったとして海賊フリントについて、「正直な話、わしは、あいつがイギリス人だということ誇りに思ったことだって、時にはあった」と言わしめている。もちろん、一義的には「あれほど残酷無道な海賊はいなかった」のではあるが。

高垣は、十八世紀イギリスの状況の中で、自国の海賊たちが唾棄すべきでありながらも賞揚すべき存在であったことを、特に後者の延長として「海の戦士」でもあったことを、この「第一篇」においてあますところなく描こうとした。その白眉としてつくりあげられたのが、フランス軍艦との海戦シーンである。戦闘場面に限って言えば六ページほどの分量ながら、たとえば「何十条といふ光の条が、花火のやうに尾を曳いては八方へ乱れ飛んだ。息が詰るやうな硝煙の匂は、鉄の焦げる匂と一しよくたになつて、人々の鼻を衝いた。」といった臨場感あふれる描写は、砲弾のとびかう海戦の様子をよく想起させ、「火焰と黒煙に包まれた敵艦ルキ三世号」の沈没、勝ったとはいえ海賊船海王号の惨状まで、一大事件の顛末を手際よく語ったものといえる。<sup>(11)</sup>

単に「わかりやすさ」を求めて時系列順に語り直すだけなら、「第一篇」の後半をそこまで海戦中心にしなくてもよかつたはずである。それが、その後の宝さがしに匹敵するほどのスリルと興奮をもって海戦を描くことで、単にその場面の迫力あるおもしろさが生まれたばかりでなく、フリント船長も——たとえ部下を殺そうと、死のまぎわにはラム酒に溺れようと——、運転士ビリー・

蛇手シルバー・水夫長ビユウ（と高垣は役割をふっている）らも皆——たとえ後日悪役として登場しよう——、それなりの勇士だったとの主張がそこに含まれていると捉えてよいだろう。彼らの船を、原作の「海象号」(The Walrus)から「海王号」に名称変更させたのも、そうした勇敢さの象徴を端的に示そうとしたのかも知れない。そういえば、島に置き去りにされたベンが、語り手から「ベン公」とやや軽んじた呼ばれ方をするのも、この海戦を経験していないためとも考えられようか。

そして、それだけの大変な戦いを経て生きのび、海賊たちが我が物とした宝は、イギリスにとっても、「敵」から獲得したいわば国益にもつながりうる宝とみなせるものになった。原作ではそうした明示はないが、高垣再話では彼らイギリスの海賊が「一等目の敵にして襲った」のは「フランスの商船」で、だからこそそれを保護しようとするフランス軍艦と戦うのだとされ、「他国の船」にとつての「悪魔か厄病神」である海賊達も、「祖国イギリス」にとつては「忠勇偉烈な海の戦士」であるという、ナショナリスティックな思想が明確に出ている。海賊たちの行為は、客観的に正当とまでは言えぬにせよ、少なくとも単なる我欲ではなく志に基いており、宝の獲得も理由ある所有だ、ということになる。それは「海賊魂」という、高垣がまえがきで用いた語に集約されるだろう。海賊自身も、それを誇りにし、またトリローニのような一般知識人も、肯定的にそれを認める。高垣再話のトリローニは、リブジーやジムを前に、留保条件なしでフリント船長を「すばらしい大海賊」と賞讃するほどである。

「海賊魂」がイギリスという国家と関連して成立している一方、宝島で海賊と対決する一般人の側にも、それにまさるとも劣らぬ「イギリス魂」がある——それが、高垣再話で派生した、しかしながら見落とすことのできぬ主張となる。原作でも、宝島上陸後、丸太小屋にたてこもった一行のうち、スモレット船長はイギリス国旗を高く掲げ、砲撃の標的となってもなおおろさない。ただしそれは「船乗りらしい、りっぱな気持のあらわれ」としてで、たまたま「うまい戦法でもあ」る、というのがリブジーの見方である。ところが、高垣再話では、この点についてのみ、語り手が顔を出し、次のように言う。

あゝ、丸太小屋の空高く、樅の木の梢に翻る我等のイギリス国旗を振り仰いだ時、六人の人々の胸には、どのやうな感激が湧き起つた事だらう。(傍点引用者)

その後も、「我々の戦闘旗」「我等の国旗」とくり返し、それに対する「尊敬と正義とのイギリス魂」を誇示する。ここだけが、語り手のなまな思いが噴出した態をなすのは、なぜか。

それは、イギリス魂の発現者として、語り手が再話作品内で設定されていた——と考えれば説明がつく。とすると、無論、「我等」と語りかけられる作品内の想定読者は、イギリス国民になる。そうして「宝」は「我等」の国益につながるもの、である。

物語中盤にいたって明らかになる「イギリス魂」の根幹まで、少し先走った。「第一篇」創作は、このように先々の記述とも照応をもつことを見通した上で、「第一篇」に戻ろう。宝島に埋められた、あの「宝」はどうなるのか。隠されたフリントは死んだ。そして海図はビルの手にわたった。だが他の海賊もそのあとを追っている。そうして、それから……、というのが、あらたに与えられた謎の構図である。それは、「わたし」のまきこまれた謎、という原作のあたりとは異なるが、別角度からの、やがて再び宝島が舞台となることを予感させる謎の設定で、原作冒頭にあたる高垣再話の「第二篇」へとつなげられていくのである。

## (2)

「第二篇」以降の高垣再話は、基本的に原作同様のストーリー展開をなす。原作では、「わたし」||ジムが体験しえなかった、トリローニやリブジーらの宝島上陸から海賊たちとの最初の戦いについて、章題にもわざわざ「リブジー医師が語る話」「医師の話のつづき」との文言を入れ、十六章から十八章までの三分は、リブジーが「わたし」として手記を綴る。一人称の手記の限界を逆手にとり、事件の現実感を強める効果があるともいえるが、多少の違和感を覚えることも確かである。高垣再話はその点、客観的にどちらをも物語って

く。だが、それ以上により高みにたつて、すべての登場人物たちをみわたしうる立場から書こうとはしない。宝島上陸から、海賊撃退、勝利と宝の獲得まで、時間を追ってみると四日間ながら、ジム少年、その他一行、上陸した海賊、船に残留した海賊、そしてペンと、大きくわければ五つの行動グループ（含・個人）が、衝突や遭遇と、錯綜した動きをする。一覧表にでもしないと全体の流れがうまくつかめないほどだが、もしその意志あれば、そうした表を念頭において、場所や時間の関係を明確にしながるべく時系列に沿って全体状況を書き進めることも不可能ではないはずである。さらにそこに、リブジーとベンのうちあわせ後の一行の様子とか、上陸海賊たちの側からの戦いの様子などをいれこむことも、比較的容易であろう。だが、高垣は、そうした方法をとらず、原作を踏襲する道を選んだ。複数の人物群の動きは、どのようにしても若干の時間の前後を生じてしか語れぬのも確かだが、関係づけをわからせる暗示などもあまり与えぬ書き方をしている。これは、より積極的に、原作の展開、構成を受け入れ、再話でもそれを順守しようとしたためではないか。

宝島上陸後の全体の成行きにおいて、常に転機をつくっていくのは、ジムの行動である。特に、先にあげた五グループ（人）の、他のすべてのグループと関わるのは彼のみである。勝手に上陸する海賊のボートにとびのり、かつ上陸するや一人になったからこそ、ペンと遭遇できた。戦闘後、丸太小屋から脱けだしたからこそ、（船の）残留海賊の様子がわかり、さらにはヒスパニオーラ号を確保できた。海賊が移ってきた小屋に戻ってつかまったからこそ、上陸海賊たちのみならず一行の様子も少しさかのぼって知ることができ、海賊たちの内輪もめも肌で感じることができ、なおかつ最終的な宝の獲得にむかってあらたな謎が提示された。ごく簡単にまとめてみるなら、以上のようにどこまでもジムが物語の中心におかれており、一人称であろうとなかろうと、彼の行動を追っていくことも効率よく、四日間の推移の要点を把握することになるわけである。別の点から言えば、先述のような四日間の動きをまとめた表を作成するとはほどいくつかの空白がそこには生じるし（ジムの欄を除いて）、そこに何も起こらなかったわけではないだろうが、「宝」追求からすれば必ずしも詮索の要はない、ということである。そして、ジムの体験に寄り添うから

こそ、読者は一応、自然にこの成行きを受けいれる。たとえば、波に翻弄され、ハンズの攻撃をかわし、ようやくに傾くヒスパニオーラ号から再上陸したジムの一日半にじっくりとつきあわされていなければ、いつのまにか船内から海賊が居なくなった同号が、なぜか島の北側にきてとまっていたりくれるなど、まさに噴飯物の御都合主義としか言いようがない。

また、こうしてジムの行動が語られていくとき、高垣再話ではしばしば、彼の性格・性情を端的にあらわす形容表現が固有名詞のジムに付けられる。「第二篇」の登場の頃から、「無邪気」「健気な勇氣」「子供らしい、冒険と空想の好きな性質」のジム、という言い方がされていたが、「第六篇」以降、「頭の鋭い」「勇敢な」「利口な」「健気」「男らしく」と明解に示す例がふえ、ことに「利口」の語が幾度も冠せられるのが目につく。原作はジム自身の手記であるため、自己分析的な評言はほとんどなく、若干それに近い言い方が出ても、それは「とっぴょうしもない」行動に出ってしまったかたの自分に対する執筆現在時からの反省や自己批判の色が濃いものでしかない。それが、三人称でジムの記述できる高垣再話では、その利点をいかし、徹底して、行動力のみならず機敏な判断力をも持ちあわせた魅力的な少年の姿をきわだたせる。これは同時に、彼の行為が字義通りの冒険であるにせよ、危い綱渡りのような成功が、「勇敢さ」や特に「利口さ」により保証されてくる、という効果も生み出す。冒険を試練として成長するのではなく、はじめから設定された性質を二つ名の如く示しながら読者の期待にこたえる——ジムはそんな小英雄であると高垣は言うのである。

そして、「第八篇」の大団円、イギリス帰還後の消息については、原作でふれられるスモレット船長、水夫グレイ、ペンのその後、不明のままのシルバーへの言及に続けて、ジムのその後があらたに付け加えられた。即ち、「勉強」「孝行」をし、そしてトリローニヤリブジーと「対等に交際の出来る、身分にまで出世」した。もともとの性質あればこそ、欠落していた財産と身分を補うことが可能となった——そうしたハッピー・エンドの一件落着である。従って、そこには原作末尾にいたってならされる「わたし」の個人的述懐——今もうなされる、あの冒険にまつわる悪夢のいくつか——は縁なきものとなる。では、

それに代わって、何がこの長編の結語とされたのか。

イギリス国中の血を沸かして、大評判となつた宝島の長い物語も、此処に、目出たく筆を擱く事にする。

「筆を擱く」のは誰か。当然、作品内の語り手書き手であろう。それは、「イギリス魂」の象徴として「我等の国旗」に心を高揚させた、「我」である。とすると、語り手は、冒頭から自覚的に、叙事詩をうたいあげるのが如く、この物語を紡いできたのではないか。「宝島の長い物語」は、決して、単なる私人の財産形成の過程でも、知人の間で記録し回覧する手記でもない。それは、イギリス国民すべてにとって記憶されるべき一大事件である。「私」人の冒険であるにせよ、「公」、「国民」的記憶に印される出来事を、同じ「公」「国民」の一員である語り手がまとめあげたのである。——という体裁を、高垣眸はとつた。

「心に浮かぶまゝに、全く自分の作品として再現」した、高垣の『宝島』。それはまぎれもなく、「イギリスの海賊魂とでもいふやうなもの」を、いやそれ以上にイギリス魂の発露を、イギリス人になりかわる語り手として再話し、「日本の少年少女諸君」に呈示したものとなつた。

## 五

先にもふれたが、高垣眸の少年小説作家としての出発は「龍神丸」にある。『少年倶楽部』一九二五年四月号から連載され、翌年五月、講談社から刊行された同作品は、高垣自身、エッセイ等で『宝島』の影響下につくられたものであると述べている。それによると、女学校の教師をしているときに、生徒たちからよく面白い話を聞かせるようねだられた。それで、「少年時代から愛読したスチブンスンの宝島を頭の中に思い描きながら、八幡船海賊の世界に直して、口から出まかせに話して聞かせてるうちに、私自身がすっかり面白くなって来た。そこで、冬休みの宿直を一人で引受けて、ガランとした宿直室で昼夜なしに四日間で一気に書き上げたのが『龍神丸』だった」という。<sup>13</sup>ここで同作品に

詳細にふれる余裕はないが、数点に絞って、語りとストーリー展開の中核と思われることを、『宝島』再話を考える補助線として指摘したい。

まず、いくつかの人物(群)を、語り手はわたり歩く。五百年前の祖先にあたる村上海賊が秘匿した宝にまつわる謎の書付けを発見した、直系にあたる九郎右衛門を首領とする一味が散り散りとなり、やがて彼の最後をみとつた吉右衛門と、遺児龍太郎が協力して再度出航するまでが描かれるが、かつての一味の万右衛門、灘右衛門、松右衛門らの思惑や離合のさま、個々の海賊たちの行動が、むしろ物語の過半をなす。そして、そのように複数の主人公たちを次々に描きつつ、さほど混乱せずに物語を読み進めることができるのは、時間経過はなおかつ単線直進だからである。簡単にいうなら、三月ごろのAの行動を書いて四月になった次は、視点がBに移るが季節も五月にすすんでいる、といった具合で、その分、全ての人物の動きを見ようとすれば結局最後まで空白が多く、長崎、江戸、シベリアと舞台もあちこちかわるだけに、合理的に構成を補おうとすれば謎や疑問も生じてしまう。その反面、とにかく季節を追い、あらたな人物の行動を点として結びあわせていけば大団円まで意表をつく展開が楽しめる。

また、五百年前の宝はもはや自然埋蔵物の如き気味もあるが、それでも、本作の中心となるのは、宝の獲得そのものではなく、正統な探索権利者の地位回復である点が目をひく。父から息子へと連なる血すじが正統性の第一条件だが、極北の地に果てた父には「龍神丸の秘宝」を受け継ぐだけの器量がなかった。息子龍太郎はその両方を満たし、仕立てられた新しい龍神丸は土佐沖の觸礁岩めざし快走するうちに、物語は幕を閉じる。

依拠すべき「公」——「イギリス魂」のような——が未だ存在しないことが、宝をいずれの人物の手にもわたしきれない理由の一端だろうか。ともあれ、ここでめざされたのは、複数の人物(群)がばらけ、その後、どう収斂していくか、その過程の波瀾万丈の各局面を、見取り方式でつないでいくことであり、つなぎあわせる強力な糸となったのが、まっすぐに進む一本の時間線である——そうした語りであった。それが、単純に「あらすじ」を語れぬ複雑な展開であるにも関わらず、「雑誌連載中から人気をあつめ」<sup>14</sup>た大きな要因だろう。

比較すれば、原作『宝島』はなるほど連載には不向きな作品であった。少なくともヒスパニオール号で出航するあたりまでは、一気に状況把握をはからないと、せっかく拾いあげた情報のモザイクが、すぐに片々とおちていきそうになる。もともと、ステイブンスンの家庭で同作品の継続的享受が可能だったのは、出発点として先に地図があったためでもあろうし、根底での海賊ごっこ、宝探しごっこといった遊びの気分を、発信者・受信者とも共有していたためでもある。単行本となった段階では、一枚の地図の挿入、「献呈の辞」やそれにつづく読者への誘いかけの詩が、遊びの世界であることの指標となり、血を流し命を奪いあう危険も、宝を勝手に我が物とすることも、安全に楽しみうることもともなっていて、イギリスで古典となりえた。

だが、せっかくの指標が、役目を果たせない場合はどうなるのか。完訳であれ再話であれ、日本でも『宝島』は独立した一冊の本として享受されることが多い。しかし完訳される場合でも、岩波少年文庫やフォア文庫のように「献呈の辞」や詩は省略されることがある。福音館古典童話シリーズや偕成社文庫のようにそれらをきちんと載せると、今度は、そこにも注釈が必要になる。いざれにせよ「遊び」の雰囲気自然に読者に感得されるという前提は、つくりようがない。

となると、宝の獲得について、いかに主人公の属する一行のなすこととはいえ、ためらいや疑問を抱く読者も出てこようし、そういう読者の懸念を払拭するためか、あるいは自身もためらいを感じてか、七〇万ポンドの使いみちをある程度指定することで、隘路を脱しようとする再話者も出てくる。たとえば、久米元一の『宝島』(偕成社、一九四六)再話<sup>(15)</sup>では、そもそも地主が宝島への出航を決意する段階で、大富豪になれる望みを口にし、すぐに続けて「さうだ、まづ貧民のために、この町に立派な病院と学校を建て、それから…」と昂奮するし、首尾よく宝を得たのち、彼は「かねての望み通り、故郷の町に、貧民のための立派な学校と病院を建て」る。また、いわゆるアニメ絵本の一冊『たから島』(ブティック社、一九九〇)でも、わずかに二三見開きの展開であるのに、最終画面でトリローニに「これだけの たからが あれば 大ぜいの／こまった人びとを たすけることができるぞ。」と言わせている。いずれも、社

会のため、公共の福祉に役立つ宝の使用が出てくるわけで、いくら命がけの冒険をしたとはいえ、勝手に宝を分けあってしまつて良しとわりきれぬ日本の読者乃至再話者の心情をうかがわせる。こうした書き加えは、いわば合理的・技術的解決としての再話化の例だが、原作のストーリー展開の主要事実は受けとめながら、それらを生かしている状況や背景の総体を受けとめそこねたか、あるいは、自身は受けとめているものの、日本の読者に納得させうる別の、背後の総体を作りあげられなかった、とも言えるだろう。

高垣は、それに挑戦した。『龍神丸』の内容から察するに、彼自身はもともと時系列に沿った語りを選択するし、宝それ自体の入手を現実味を帯びて把握したいとも思っていないかっただらう。また、海賊についての何らかの説明が、日本の読者には必要だとも考えただろう。彼は、それらを別個に、技術的に処理してステイブンスン『宝島』を紹介することはしなかった。そうではなく、原作のイギリスらしさの現われともいえる「遊び」の精神にかわって、「海賊魂」と「イギリス魂」が火花をちらす、イギリス国民にとつての「叙事詩」として、物語をつくり直した。原作で与えられている情報を極端に逸脱することなく、しかし、根本精神とプロットがあらためられた『宝島』。その再話が読者にも受けとめられたことは、先述の田中芳樹の感想からも十分推測できる。

## 六

作品が翻訳される。再話される。翻案される。あるいは、真似て書く。示唆を受けて創作する。……といった、作品のつながりを考えていくとき、どこまでを、もとの作品の変奏とみなし、どこからをテーマの似通う別の作品と認定するか、という問題がおきる。

『宝島』と高垣眸の関係についていえば、彼の『宝島』再話はやはり、〈宝島の世界〉として数えうるものである。ここで、〈世界〉とは、歌舞伎での〈曾我の世界〉とか〈源平の世界〉といった言い方から仮に借用している。一方、『龍神丸』は、舞台が日本となつていてことを考慮の外としても、〈宝島の世界〉とは言い難い。「宝」と「島」、「少年」の登場といった個別の要素は共通するにしても、どちらかといえば貴種流離譚の匂いが強いように思う。高



垣にとっての、〈宝島の世界〉は、彼があらたにその外に創作を派生させるとき、どのような助けとなり、あるいは制約となったのだろうか。

少年期の高垣が愛読した作家、押川春浪も、前述のように『宝島』翻訳を手がけている。押川にはヴェルヌの影響もみられるが、彼の海洋冒険譚のどこかに『宝島』が影をおとしているなら、高垣の作品は原作『宝島』からの単線的な〈世界〉認知をしにくくなる。また、大仏次郎が一方で『宝島』<sup>(17)</sup>翻訳を行い(といっても実質は兄の野尻抱影の訳)、他方、「山の城水の城」<sup>(18)</sup>という、やはり『宝島』に影響を受けつつも日本を舞台にした作品を書いていることを考えあわせるなら、〈宝島の世界〉はさまざまな派生する物語をうみだしやすい土壌をもっているとの見方も出てこよう。

『宝島』というイギリスの一作品が、日本にどのような受容のされ方をしたのか。その考察の一步でもある本研究は、同時に、児童文学における創作や翻訳、再話の相互連関を総合的に見たしていくための一步でもある。次には、右に述べたいいくつかの再話や創作にふれながら、各作品の執筆者個人の資質及び執筆年代も対照させつつ、研究を広げていくこととしたい。

#### 〈注〉

(1) これについては小論「物語世界の再生と変容——書きつき／書きかえと読みつき／読みかえの力学——」(日本児童文学学会編『現代児童文学の可能性』〈研究Ⅱ日本の児童文学〉第四巻、東京書籍、一九九八)を参照されたい。

(2) 今日入手できる代表的な少年少女向日本語訳には左のようなものがある。

- ・ R・L・ステイブンスン作、坂井晴彦訳『宝島』(福音館古典童話シリーズ)、福音館書店、一九七六
- ・ ステイブンスン作、阿部知二訳『宝島』(岩波少年文庫)、岩波書店、一九六七
- ・ R・ステイブンスン作、亀山龍樹訳『宝島』(フォア文庫)、童心社、一九八七

・ ステイブンスン作、金原瑞人訳『宝島』(偕成社文庫)、偕成社、一九九四

このうち本論での引用(人名その他)にあたっては福音館版を使用した。なお英語版は、Robert Louis Stevenson, *Treasure Island* (Penguin Popular Classics), A. Penguin/Godfrey Cave Edition 1994 を参照した。

(3) 小論「選ばれた「名作」——『岩波少年文庫』と『世界名作全集』の共通書目——」、『千葉大学教育学部研究紀要』第四六巻Ⅱ、一九九八。

(4) 瀬田貞二他『英米児童文学史』、研究社、一九七一。

(5) 原作は六部にわかれ、三四章から成る(第一部 老海賊／第二部 船の料理番／第三部 わたしの陸上での冒険／第四部 とりでの柵／第五部 わたしの海上での冒険／第六部 シルバー船長)。高垣再話は八部にわかれ、その下は章の番号がない小見出しで七八区分されている(第一篇 フリント船長の海図／第二篇 老海賊／第三篇 船の料理人／第四篇 宝島に上陸して／第五篇 柵小屋の戦闘／第六篇 ヒスパニオラ号／第七篇 シルバー船長／第八篇 フリント船長の宝)。このうち第一篇及び付随して第二篇冒頭の小見出し一つ(「ビリーを追跡しろ」)が、高垣によって新しく綴りあわされた部分にあたる。その後は多少の区分の差はあるが大まかにはほぼ合致、また第八篇は、原作第六部の後半を単に区分けしたものである。

(6) 同誌同年一、三、四月の三回にわたる。なお、これについては川戸道昭・榊原貴教編『ステイブンスン集』(『明治翻訳文学全集』〈新聞雑誌編〉)第七巻、大空社、一九九九)を参考にした。

(7) ステイブンスン作、阿部知二訳『宝島』(岩波文庫)、一九六三。なお「あとがき」では同エッセイについて、作者が「特有の諧謔と皮肉と自負とを持って語」っている点ならびに「この物語誕生の挿話そのものが、すでにステイブンスンの魅力をもっている」点が指摘されている。

(8) カーペンター、プリチャード著、神宮輝夫監訳、原書房、一九九九。なお、「ステイブンスン」「宝島」の項はいずれも神宮輝夫が訳を担当。

(9) 石井桃子他『子どもと文学』、中央公論社、一九六〇。

(10) 十九世紀なかばに児童文学によく出てくる登場人物となったこと、文学のなかのみならず歴史上の海賊たちも多彩であることが記され、それぞれ代表的な作品名や人名があげられている。また『宝島』については「普遍的な海賊文学の古典」との位置づけが示される。なお、訳は横田順子の担当。

(11) 作家の田中芳樹が、幼時の『宝島』読書体験を語っている。「とてもワクワクしながら読んだのが、記憶に残っています。はじめに海賊船と軍艦との海上での戦闘場面があるんですが、そこが無類におもしろいのです。」そして、高校生になり全訳を読み、その場面がないことに驚く。田中は「ダイジェスト版」といつているが、恐らくは高垣の『宝島』再話を読んだと考えてよからう。読者にとって強く印象に残る場面となった一例としたい。(田中芳樹・青木玉「『運命』対談」、『IN★POCKET』一九九九年八月号。)

(12) 「第二篇」でプリントの海図を見、宝さがしの航海を即座に思い立ったトリローニについて、「大冒険を思ひ立つただけでも、心が躍り立つトリローニ氏は、イギリス魂の標本のやうな紳士だ。」と評されている。しかしやはり、後述の小屋での箇所に、「イギリス魂」という語を使用した再話者高垣の強い思いが反映しているだろう。

(13) 高垣眸「額田六福の想い出と『龍神丸』」、『高垣眸全集第二巻 龍神丸』桃源社、一九七〇。なお、今回は同書及び『龍神丸／豹の眼』（講談社大衆文学館）（講談社、一九九七）を参照した。ほかに『龍神丸』（高垣眸全集）（ポプラ社、一九五〇）など第二次大戦後も子ども向けに刊行された版があるが、文章の手入れがされている。

(14) 尾崎秀樹「高垣眸解説——人と作品——」、『日本児童文学大系 第二〇巻』、ほるぷ出版、一九七七。

(15) ジムの一人称「僕」で物語られる体裁は守られているが、原作の半分程度かそれ以下の長さに縮められている。また、結びでジムが今もうなされる夢が、ヒスパニオーラ号を確保する際の追いかけてくるハンズの顔に変更されるなど、久米独自の部分もある。

(16) よい子とママのアニメ絵本通巻四六号、また題名には「せかいめいさくシリーズ」とも銘うたれている。原作／ステイブソン、脚色／平田昭吾とも記されるが、奥付の囲み内では著書／平田昭吾とされる。なお、一九九七年十二月三十一日第八刷を参照した。

(17) スティヴソン、野尻清彦訳『宝島他三篇』（世界大衆文学全集第一八巻）、改造社、一九二八。ただし野尻清彦は大仏次郎の本名。なお、今回参照したのはR・L・ステイブソン著、大佛次郎訳『宝島』、恒文社、一九九七。

(18) 『小学四年生』一九五八年四月号から翌年三月号まで、ひきつづいて『小学五年生』一九五九年四月から翌年二月号までの、計二三回連載された作品。

\* 本稿の骨子は、第三八回日本児童文学学会研究大会（於・大阪国際女子大学、一九九九年一月二二日（日））で発表した。

\* 本稿は、平成一一年度科学研究費基盤研究(C)(2)「近代日本の翻訳・再話と読者意識——児童文学への変容を中心に——」の研究成果の一部をまとめたものである。